

「ヨハネの誕生」 ルカ1:57~80

1. はじめに

(1) ヨハネとイエスの対比

- ①誕生の告知
- ②実際の誕生物語
- ③神の約束が成就し、人々に喜びをもたらす。

(2) ヨハネよりもイエスの方が偉大である。

(3) ルカ1:36 マリアとエリサベツが親戚であるという意味。母方の親戚である。

2. アウトライン

(1) ヨハネの誕生 (57~58節)

(2) 割礼と命名 (59~66節)

(3) ザカリヤの賛歌 (67~79節)

(4) ヨハネの成長 (80節)

3. メッセージのゴール

(1) イエスとヨハネの対比

(2) 信者の手本としてのザカリヤ

(3) 日本人伝道のヒント

このメッセージは、ヨハネ誕生の意味について学ぼうとするものである。

I. ヨハネの誕生 (57~58節)

1. 57節

「さて月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ」

(1) 短くて簡潔な記述である。

(2) 「月が満ちて」

①創21:2~3 サラがイサクを生んだ。「神がアブラハムに言われたその時期に」

②ルカ2:6~7 「マリアは月が満ちて」

2. 58節

「近所の人々や親族は、主がエリサベツに大きなあわれみをおかけになったと聞いて、彼

女とともに喜んだ

- (1) 近所の人々や親族は、彼女とともに喜んだ。
 - ①イエス誕生の際には、羊飼いたちが喜んだ。
- (2) 文法的考察
 - ①主の業は終わっている。「大きなあわれみをおかけになった」（アオリスト形）
 - ②喜びは共有され、継続している。「彼女とともに喜んだ」（未完了形）

II. 割礼と命名（59～66節）

1. 59～61節

「さて八日目に、人々は幼子に割礼するためにやって来て、幼子を父の名にちなんでザカリヤと名づけようとしたが、母は答えて、『いいえ、そうではなくて、ヨハネという名にしなければなりません』と言った。彼らは彼女に、『あなたの親族にはそのような名の人ひとりもいません』と言った」

- (1) 8日目の割礼（創21：4）
 - ①幼子は8日目に割礼を受けた。アブラハム契約のしるし。
 - ②イエスも8日目に割礼を受けた（ルカ2：21）。
 - ③パウロの例（ピリ3：5）

「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、」
 - ④この習慣は、今も続いている。
- (2) 命名
 - ①誕生直後の命名もある。
 - ②通常は、長男は祖父の名を受け継ぐ。
 - ③父の名は例外的なもの。その場合は、「ザカリヤ・ベン・ザカリヤ」となる。
- (3) 母（エリサベツ）の拒否
 - ①非常に強い否定。「ウーキ」という言葉。
 - ②「ヨハネという名にしなければなりません」
 - ③どうして知っていたのか。夫ザカリヤから筆談で聞かされていたのであろう。
- (4) 人々の反対

- ①女性の言葉である。
- ②さらに、親族にそのような名の人がない。
 - *系図を意識している。
 - *先祖への敬意を表している。

2. 62～66節

「そして、身振りで父親に合図して、幼子に何という名をつけるつもりかと尋ねた。すると、彼は書き板を持って来させて、『彼の名はヨハネ』と書いたので、人々はみな驚いた。すると、たちどころに、彼の口が開け、舌は解け、ものが言えるようになって神をほめたたえた。そして、近所の人々はみな恐れた。さらにこれらのことの一部始終が、ユダヤの山地全体にも語り伝えられて行った。聞いた人々はみな、それを心にとどめて、『いったいこの子は何になるのでしょうか』と言った。主の御手が彼とともにあったからである」

(1) ザカリヤへの問いかけ

- ①身振り手振りで尋ねた。
- ②ザカリヤは一時的な聾啞状態にあった。

(2) ザカリヤの回答

- ①書き板とは、木の板にロウを被せたもの。通常は、鉄のペンを使用した。
- ②「その名はヨハネ」
- ③エリサベツが提案した名と同じなので、人々は驚いた。

(3) ザカリヤの癒し

- ①彼は、9か月間聾啞状態にあったが、それがたちどころに癒された。
- ②彼が最初にしたことは、神をほめたたえることである。

(4) 人々の反応

- ①恐れが人々を襲った。恐怖ではなく、畏怖の念である。
- ②噂がユダの山地全体に広がり、人々は互いにそれを話題にした。
- ③この子の将来を想像し、大きな期待を持った。
- ④マタ 3:5～6

「さて、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川沿いの全地域の人々がヨハネのところへ出て行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けた」

Ⅲ. ザカリヤの賛歌 (67～79節)

1. イントロダクション (67 節)

(1) 67 節

「さて父ザカリヤは、聖霊に満たされて、預言して言った」

- ①ザカリヤの賛歌を「ベネディクタス」(ラテン語)という。
- ②ギリシア語では、一つの長い文である。
- ③その内容は、詩篇や預言書からの引用で満ちている。
 - *彼は、メシア預言の成就を見ている。
- ④これは、聖霊に導かれて語っている預言である(以下の3点が含まれている)。*将来の出来事を告げる。
 - *神を賛美する。
 - *神のことば(福音の正しい理解)を伝達する。

2. 呼びかけ (68 節 a)

(1) 68 節 a

「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を」

- ①詩篇や預言書にたびたび登場する表現である。
- ②マリアの賛歌も、同様の言葉で始まっている。
- ③エペ1:3~10、2コリ1:3~4、1ペテ1:3~5

3. 主をたたえる理由 (68b~75 節)

(1) 68b~69 節

「主はその民を顧みて、贖いをなし、救いの角を、われらのために、しもべダビデの家に立てられた」

- ①未来完了形(マリアの賛歌と同じ)。預言的完了形である。
- ②「贖い」とは、政治的意味ではなく、霊的意味で用いられている。
- ③「救いの角」とは、メシアのことである。
 - *角を持った動物の力は、その角にある。
- ④メシアとは、ヨハネのことではなく、ダビデの家系から登場する。
- ⑤ザカリヤは、イエスとヨハネが同じ計画の2つの部分であることを理解した。

(2) 70~75 節

「古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、主が話してくださったとおりに。この救いはわれらの敵からの、すべてわれらを憎む者の手からの救いである。主はわれらの父祖たちにあわれみを施し、その聖なる契約を、われらの父アブラハムに誓わ

れた誓いを覚えて、われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される」

①イスラエルの民を解放するという預言の成就

*新しい宗教の創設ではない。

②「われらの敵」、「われらを憎む者」とは、政治的な敵ではない。

③アブラハムへの誓いの成就(創22:16~18)

「これは【主】の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである」

④ザカリヤは、以上のことを預言的完了形で語っている。

4. ヨハネの奉仕に関する預言(76~79節)

(1)76a節

「幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう」

①ゼカリヤは、直接幼子に呼びかけている。

②「いと高き方の預言者」

(2)76b~79節

「主の御前に先立って行き、その道を備え、神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。これはわれらの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、日の出がいと高き所からわれらを訪れ、暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く」

①メシアの先駆者としての働き

②救いの内容を教える。

*罪の赦しによる救い。

*メシアは政治的メシアではない。

*これが先駆者の究極的使命である。

③「日の出がいと高き所からわれらを訪れ」とは、メシアの到来のこと。

*イザ60:19参照

IV. ヨハネの成長(80節)

1. 80 節

「さて、幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に公に出現する日まで荒野にいた」

- ①ヨハネは、両親亡き後、ユダの山地近辺の荒野に住んだ。
- ②若い時から、エリヤ的生活を選んだ。彼の自己認識と関係がある。
- ③ルカ3:2につながる。

「アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った」

- ④ルカ2:40と似ている。
「幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちていった。神の恵みがある上にあつた」
- ⑤2人の子どもは、30年後に同じ神の計画を進める働きに合流する。

結論：

1. イエスとヨハネの対比

(1) 2人の幼子は、ともに同じ神の計画を担う。

- ①ザカリヤは、ヨハネの誕生によって新しい時代が到来したことを知った。
- ②マリアは、イエスの誕生によって同じ確信を持った。

(2) イエスの優位性が強調されている。

①誕生物語の対比

- *ヨハネは1:57~58までの2節。
- *イエスは2:1~20までの20節。

②呼称の対比

- *ヨハネは「いと高き方の預言者」(1:76)である。
- *イエスは「神の子」(1:35)である。

③ヨハネをイエスと同列に論じてはならない。

2. 信者の手本としてのザカリヤ

(1) マリアは信者の理想的な手本である。

(2) ザカリヤは、信者の現実的な手本である。

- ①彼は、旧約的な意味での義人である。

- ②彼は、信仰によって救われている。
- ③しかし彼は、不信仰のゆえに聾啞状態に陥った。
- ④これは、救いの喪失ではなく、神からの訓練である。
- ⑤神のことばを認めた時に、聾啞状態から解放された。
- ⑥同じことが私たちに起こる。

*罪を犯すと、「信仰のことば」を失う。

*解決策は、1ヨハ1:9である。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」

(3) 日本人伝道のヒント

①1コリ1:21~24

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」

②違和感に満ちたルカの福音書の書き出し

*ユダヤ的雰囲気と背景

*イエス誕生とヨハネ誕生にまつわる神の奇跡的介入

③これらの要素は、聖書が教える救いが、私たちの常識的認識の延長線上にはないということを教えている。

④ユダヤ人たちは、メシアの到来と御国の時代の到来を待ち望んでいた。

⑤彼らの常識は、神の目からは非常識であった。

*救いとは、ローマの圧政からの解放を理解されていた。

*救いとは、霊的なもの、神との関係の回復である。

*敵とは、罪の性質、食欲、肉欲、自己中心性、サタン、悪霊などである。

*人間世界でのすべての対立を解決する鍵は、神との和解にある。

⑥伝達方法の工夫は必要であるが、福音の内容に関する工夫は不必要である。